

長崎県及び長崎市医師会の皆様へ

謹啓

初夏の候、皆様には、ご健勝のことと拝察申し上げます。

さて、この度の東日本大震災及び原発事故災害に際しましては、長崎県医師会及び長崎市医師会の先生方には、誰もが嫌った放射線被曝という過酷な災害医療の現場に、臆する事も無く淡々と、訪問診療や避難現場での診療等、そして又、多額な義援金まで、物心両面にわたるご支援、とても心強く、ありがたい、感謝の思いでいっぱいでございます。

改めて、心より深く御礼申し上げます。

3月11日午後2時46分、午後の診療を何時も通り、普通におこなっておりました所、突然、異様な空気になったと思った次の瞬間、建物が突き落とされた様な激しい上下震に次いで、大きく床がゆれはじめ、医療器械や何もかもがかってに動き出し、堪えているのがやっとでした。直ちに皆で整理していた所、次々と襲ってくる余震のため、出たり入ったり、まるでマラソン大会の様でした。そんな時、3時35分頃、大津波の情報が入り、救助に行く職員や、混乱する怒号や叫び、空前の事態であることが分かりました。

波の引いたあとは、この世のものとは思えない、地獄絵巻の様な瓦礫と泥、その中に死体のごろごろと散乱し、言葉を無くしました。更に、翌朝5時44分、福島第一原子力発電所の事故が報道され、半径10km圏内の住民に避難指示が出され、同日夕方6時25分には、20km圏内の住民にも、避難指示が出されました。2重、3重の災難が次々と間を告げずに襲いかかり、混乱の中、市民は冷静さを失いました。

担当の各市医師会員が、検死に借り出されましたが、多すぎて手が足りなく、応援の要請が出されました。しかし、その直後より、会員に連絡しようにも電話、携帯が通じなくなっており、これが混乱の始まりだと思いました。

とにかく私も検死を手伝おうと翌日、現場の原町高等学校体育館に行ってみました。応援の各県警の中に、白装束の搬送部隊もあり、次々と運ばれてくる死体を渡り廊下の一角で、身に着けているものや携帯しているものをまとめ、衣服を脱がせ、確かめながら洗い、次いで体育館内に運び、計測、外傷の位置、大きさ等、順々に整理し、体育館いっぱい、並べられておりました。その中で、5-10人ぐらいをまとめて、検死し、検案書を作成する作業の繰り返しでした。その後、別な高校の体育館の遺体安置所に運ばれます。知っている人もおり、その悲惨で壮絶な状況には、ただ涙するしかありませんでした。

14日、月曜日の外来の待合室は、情報通信が全く通じないため、情報交換

の場となり、生きていることを確認して喜んだり、亡くなった人を悲しんだり待合室は興奮と悲しみの渦となりました。又、刻々と変わる原発の状況を、毎日TVを食い入るように見ていましたが、情報が錯綜する中、小高区の2病院は入院患者が全て搬送され閉鎖、診療所群も全て閉鎖消滅、次いで原町区も次々閉鎖し消えていきました。

原町区の5病院も患者の搬送が始まり、病院の職員も診療所の職員も次々と避難し、休むようになり、10km、20km、30km、と情報が流れると、職員は言うまで間なく、患者も少なくなり、入院している患者までが次々と消えていなくなりました。あつっと言う間のできごとでした。

情報通信が全く通じないため、広報車で連日連絡、避難の為バスにのる説明会が、毎晩開催され、15日よりバスによる避難が、毎日のように始まりました。16日夜9時頃、病院の2階から見ていると車の明かりが連なり、この異常状態は何だろうと思っておりました。

次の日、スーパー、店、ガソリンスタンド、銀行等、ありとあらゆる生活の全てが無くなっており、無人のゴーストタウンに近い町となっております。その間も残った数人の職員と共に、ただ一人で診療しておりましたが、全ての物資及び医薬品も手に入らないため、18日(金)、最後まで残った数人の職員たちを次々と今生の別れのように、見送りその夜、「リステル猪苗代」に脱出致しました。

断腸の思いで避難した、翌日から意外な事に通信が可能となったため、電話をしまくり、県の薬務課へ、医薬品の流通路の確保、自衛隊輸送班への依頼、通産省との連携の確認し、3月21日、知人が不足しているガソリンをどうにか調達して、郡山より猪苗代まで運んでくれたのを機に、夕方より、南相馬市に戻りました。

22日より診療を再開、多数の患者が待っていました。毎日、自分を頼ってきてくれる患者さんと共に、命があれば、そして健康であればよしとし、真摯に現実と向かい合うことこそ、全人的医療だと痛感いたしました。

その後、戻ってくる高齢者が多くなり、再開した診療所も増えてきた中で、震災・原発事故前には、5カ所あった分娩できる医療機関は、私の所を除いて、全部再開しておりません。それは、事故前には南相馬市及び周辺市町村から、月に100例弱あった分娩が、事故後には、2カ月を過ぎましたが、分娩は、南相馬市全体で2例しかなく、再開しても成り立たないからなのです。小児科専門の診療所も再開院しましたが、子供がいなく、閉院してしまいました。

そんな中、南相馬市医師会は4月14日、緊急理事会を開き、運営が不可能

なため事務職員1名を解雇し、借用していた保健センター内にある医師会館を市に返還し、解散する事が決定されました。

その翌日、思いもよらず、長崎市医師会会長の野田剛稔先生が訪問され義援金を頂きました。会計幹事と話し、早速、医師会存続を決定しました。そして又、長崎県医師会会長の蒔本恭先生からも、更に義援金を頂き、南相馬市医師会は天の助けを得て、蘇生することが出来ました。

その後、4月22日から、小高区は更に厳しい警戒区域に設定され、進入できなくなりました。原町区は一部、屋内退避から、緊急時避難区域に変更されました。

先日5月12日に総会を開き、長崎市医師会及び長崎県医師会の義援金を頂いた旨と、医師会が蘇生した事を報告致しました。離散し放浪している会員達も集まり、今後の南相馬市の医療、保障等討論し、4時間激論を交わされました。この姿を見て私は本当にあり難く、嬉しく思いました。結果、福島県医師会会長と常任理事との話し合いがもたれる事になり、医師会が1つにまとまりました。その中で、3病院を含む、20の医療機関が廃院又は休業となっていることが分かりました。

最近では、郵便も普通に配達されるようになり、殆どの銀行も再開し、スーパーも始まりました。一見平和が戻ったように見えますが、心から喜ぶ事が出来ません。これから、何年かけても、絶対に旧に戻らないものが、たくさんあるからです。

今回、長崎県医師会及び長崎市医師会の先生方には、スピードそして、その行動力に心から敬意と感謝の意を表したいと思えます。ありがとうございます。

明日の見えないこの地域で、一体、これから何が出来るのか分かりませんが、じっくり考えながら、臨機応変に、日々是決戦ととらえ、医師として地域と共にありたいと思えます。

遅ればせながら、心よりのお礼と、経過報告をさせていただきます

敬具

平成23年5月18日

南相馬市医師会長

医療法人誠愛会

原町中央産婦人科医院

高橋 亨 平